

## 「家族・家庭生活」における授業実践<sup>1</sup>

愛知教育大学附属高等学校 橋爪 友美子

愛知教育大学家政教育講座 山根 真理

### I はじめに

「家族・家庭生活」は、本報告の事前調査にもみられるように、「家庭科」で学ぶ内容の中で、必ずしも生徒たちが学ぶことを大きく期待する内容ではない。しかし、青年たちが自らの人生を展望し、「生きること」と社会のかかわりを考えるうえで、「家族・家庭生活」は、ひとつの有効な学びの糸口である。

青年たちが「家族・家庭生活」を学ぶ意味は、その難しさと表裏一体である。現代社会は、青年たちにとって希望あふれる人生の展望を持つのは、難しい社会である。「働くこと」に関しては、1990年代後半以降「非正規化」が進行し、長期的な人生展望が持ちにくい状況が続いている。そのような労働状況を反映して、家族については、安定した「近代家族」を形成する基盤が失われてきている（船橋・宮本編著：2008、山田、2005）。子どもを育てる家族の経済格差は拡大し<sup>2</sup>、国際的にみても「子どもの貧困率」は高いグループに属し、税や社会保障によって再配分しても「子どもの貧困率」は是正されず、かえって高まっていることが指摘されている。（子どもの貧困白書編集委員会編、2009）子ども・青年たちが生活するなかで、「格差」や「貧困」に直面する場面も少なくないと考えられる。

しかし他方で、「家族・家庭」の価値は、「家庭教育」や「親学」を推奨する政策動向だけでなく、社会的な風潮として、強まっているように思われる。（本田、2008）若い人たちの意識も、例外ではない。2012年に内閣府が実施した「男女共同参画に関する世論調査」において、性別役割分業を肯定する人の割合が前回調査より増加し、20代の年齢層でその傾向が顕著にみられることも、その一つの現れとみることができるように思う<sup>3</sup>。離婚・再婚の増加や晩婚化などの家族の現代的変容は1970年代半ば以降、進行しているが、その一方で婚外子差別撤廃や夫婦別姓選択制などのライフスタイル中立に向けた社会制度変革は、1990年代以降、社会的議論の俎上に上りはしているが、制度改革としては実現していない。

格差拡大、家族の現代的変容、「家族・家庭」の価値称揚が混在する現代の状況は、青年たちが確実な現実認識をもって人生を展望することを困難にしている。しかし、だからこそ、社会と家族の関係を理解したうえで、人生の多様な選択肢と、人生を支える社会制度や人間関係網の可能性を知るうえで、「家族・家庭生活」の学びは大きな意義を持っている。

2以降でまとめられている授業報告は、2012年度に愛知教育大学附属高等学校2年生の生徒に対して、家庭科の中で行われた「家族・家庭生活」の授業に基づくものである。ライフコース全体を展望して生活を創造すること、社会とのかかわりで家族・家庭生活を理解することを目標においている点で、可能性を秘めた取り組みと位置づけることができるだろう。

## II 授業実践の目的

高等学校新学習指導要領（2009年3月告示）において、普通教科「家庭」（以下「家庭科」という）の目標について、「家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わりについて理解させる」と規定している。これは、家族・家庭についての理解、共に生きる生活観の育成、家庭生活事象の根底にある原理・原則についての科学的理解、理解したことを実際の生活の場で実践できるための技術の習得、生活を総合的に認識し何がよいかを判断する意定能力、課題を解決する問題解決能力などを育成し、家庭生活を創造できるようにすることを目指している。

家族・家庭生活の理解においては、生活するための知識や技術を断片的にとらえるのではなく、生まれてから死ぬまでの人の一生を時間軸としてとらえることが重要である。人の一生の各ライフステージごとの課題を達成するために、生活資源や生活活動などを総合的にとらえることによって、生徒自身が現在や将来の生活に関心を持って学習を進め、家庭生活を営むための実践的な態度を育てることができると考える。

指導にあたっては、特に、家族・家庭が社会とのかかわりの中で機能していることについても理解させ、家庭の機能、家族構成や家族規模、ライフスタイルなどが大きく変化する中で、改めて家族・家庭の意義について認識させたい。また授業を通して、自分らしく生きるとはどのようなことか、自分自身を見つめ、将来について考え、また、現在の家族（生育家族）とのコミュニケーションや家族の役割、自分の役割などについて考え、そして、パートナーとの出会い・結婚について考えることにより、自分で創る家族（創設家族）についても考えさせ、将来は男女が協力して創る家庭生活を送って欲しいと考える。

これらのことをふまえた上で、本報告では、「家族・家庭の意義、家族・家庭と社会との関わりについて理解させる」ため、本校家庭科「家庭基礎」において、自分の意見のみを考えるのではなく、他人の意見も聞くことにより、様々な考え方を学ぶために、より実践的、体験的な学習活動を重視した題材を開発した実践事例について紹介したい。

## III 研究方法

### （1）事前アンケート調査の実施

本校第2学年で実施している家庭科の年度初めの授業で生徒へ行ったアンケートにおいて、家庭科で学習するそれぞれの単元について学びたい順に順位をつけてもらい、「家族・家庭生活」に関して、どれくらい興味・関心があるか？どんなことを知りたいと思っているのか？」を調査した。

### （2）「家族・家庭生活」の授業実践

授業の概要は、以下の通りである。

実施時期・・・4月～6月

実施学年、クラス・・・第2学年 1組～5組

授業時数・・・14時間

### （3）事後アンケート調査の実施

「家族・家庭生活」の授業に担当している14時間の最後の授業で「家族・家庭生活」についての分野、中でも性別役割分業意識や結婚観、家族観について調査した。

## IV 事前アンケートの結果

年度はじめに行ったアンケート項目とその結果を、以下に示す。

<アンケート項目1>

家庭科の授業で扱う以下のそれぞれの項目について、学びたい順に順位をつけると？

- ① 家族・家庭生活 ②保育 ③福祉 ④食生活 ⑤衣生活 ⑥住生活  
⑦消費生活・家庭経済 ⑧生活設計

表1 事前アンケート結果1

(人数)

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
① 家族・家庭生活	10	21	20	24	34	35	15	17
②保育	40	35	31	15	9	23	11	16
③福祉	5	7	12	25	33	33	38	20
④食生活	93	43	14	14	7	7	2	0
⑤衣生活	11	40	39	29	19	18	5	16
⑥住生活	9	15	28	31	27	19	30	17
⑦消費生活・家庭経済	8	7	18	23	17	16	47	36
⑧生活設計	3	10	16	14	29	24	26	52
不明・無回答	14	15	15	18	18	18	19	19
計	193	193	193	193	193	193	193	193

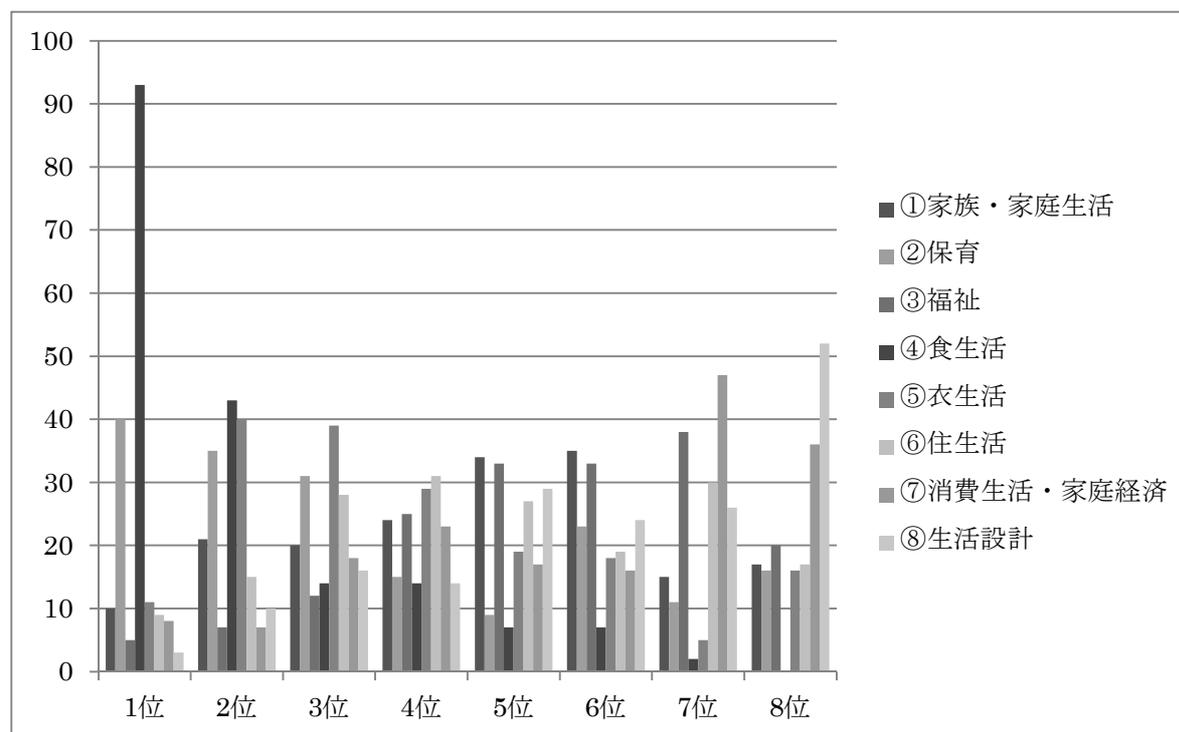


図1 事前アンケート結果1 (人数)

## <アンケート項目2>

家庭科の「家族・家庭生活」の項目で学んでみたいことは何ですか？（日常生活の疑問・知りたいことなど何でも良い）

表2 事前アンケート結果2

※（ ）内の数字は回答した人数を表す

<回答数：2年生193名>

家族との関わり方 (10)	自分らしい生き方 (9)	家族と法律 (4)
家族の意味 (4)	自分らしさとは (4)	家族家庭の問題 (3)
パートナーと出会う (3)	家族について知りたい (3)	家族の重要性 (2)
どうすれば良い生活を送れるか (2)	正しい生活の仕方 (2)	
家事の仕方 (2)	家族家庭とは (2)	良い家庭の築き方 (2)
今自分がすべきことはなにか (2)	自分の適性について考える (2)	
※以下、すべて回答者1名		
自分らしさとは	自分の存在意義について	自立について考える
人生について	働くこと	よりよい生き方
将来の夢について	生い立ち学習	友人関係
ライフステージと発達課題	それぞれの年代の特徴	夫婦円満の秘訣
家庭生活について	家族の役割	家族構成
生活を振り返る	他の家の家族	家族との距離感
主夫について	昔の生活の様子	心理的なこと
戸籍	冠婚葬祭のマナーやルール	四季ごとの伝統行事や食文化
		理想の家族構成
		模範的な家族
		家での過ごし方

アンケート項目1の結果からは、家庭科で学びたい単元について、1位は圧倒的に「食生活」が多かった。次に「保育」そして、「衣生活」が続く。「住生活」は4位にあげた生徒が最も多く、「家族・家庭生活」については5位6位にあげる生徒が多い。「福祉」は7位にあげる生徒が多く、「生活設計」は8位が多いという結果になった。

このことから、高校生にとって男女とも食生活への関心が高いということがわかる。また、食生活に関しては、調理実習を行いたい、バランスのよい食事の取り方を学びたいといった意見も多かった。「保育」は、女子の関心の高さが目立ったように思われた。自分が親になった時の子どもの育て方を学びたい、子どもとの接し方を学びたいといった意見が多かった。「衣生活」については小・中学校と行って来た被服実習などが生徒の印象に残っており、いろいろなものを作りたいといった意見が多かった。上位の単元についてはどれも何を学ぶのかイメージしやすく、実技・実習に重点をおく分野であることが共通している。しかしながら、生徒にとって「家族・家庭生活」においては何を学ぶのかということが他の上位の項目と比べてイメージしにくいということから、5位6位という結果になったのではないかと思われる。

アンケート項目2の結果からは「家族・家庭生活」において学びたいことについて、家族との関わり方について学びたいという意見が多く、現在、そして将来の家族とのよりよい関係を築きたいといったような気持ちをもつ生徒が多いことが分かる。また、自分の進路や職業について考える時期ということもあり、自分らしい生き方についても学びたいと思っている生徒が多いことが分かる。

以上の結果より生徒にとっては比較的関心の薄い「家族・家庭生活」についての分野をできるだけより実践的・体験的な学習活動を重視した題材を開発し、生徒自身が現在や将来の生活により関心を持って学習を進め、家庭生活を営むための実践的な態度を育てることができるよう研究をすすめることにした。

## V 授業構成

本研究で行った授業の構成は、以下の通りである。

### (1) 自分を見つめる

- ①自分の適性について考える。ライフステージと発達課題について知る。
- ②自分らしく生きる例に、児童文学者の灰谷健次郎さんやアルピニストの野口健さんのビデオを見て自分らしく生きるとはどういうことか考える。
- ③男女で担う家庭生活  
性別役割分業意識を見直し、男女が協力して家庭を築くことの意義について理解し、その解決方法を考える。

### (2) パートナーと出会う

- ①さだまさしの「関白宣言」と「関白失脚」、平成の「関白宣言」といわれる三木道三の「Lifetime Respect」を視聴し、比較対照してみる。
- ②パートナーにするならどんな人がよいか、考えてみる。
- ③結婚について近年の状況を知る。

### (3) 家族って何だろう

- ①自分の家族、理想の家族について考える。
- ②家族の形態とその変化を知る。  
家族には核家族、拡大家族があるが、現代では暮らし方の多様化に合わせて様々な形態があることを知る。
- ③家庭の機能を考える。  
家庭の様々な機能を理解するとともに、家庭の機能が家族それぞれの協力により果たされていることを認識する。
- ④家族を取り巻く問題について考える。
  - ・新聞記事から日本の家庭・家族に関する問題を知る。(孤独死など)
  - ・現代の家族が抱える問題点とその解決への手掛かりについて、意見を出しあい話し合う。(児童・高齢者虐待、ドメスティックバイオレンスなど)

### (4) 家族と法律

- ①簡単な「家族法クイズ」を通して、家族の法律について知る。
- ②明治民法、現行民法の比較。親子・扶養・相続の法律。民法改正への動きについて知る。

### (5) 世界の家族

スウェーデン、韓国、中国の中から一つ国を選び、同じ国を選んだ人でグループを作り討論する。その国に基づく資料などから、他の国の家族の特徴を知り、また日本との違いについて比較することにより、日本の家族の特徴をあげる。グループで話し合い、まとめ、発表する。

## VI 事後アンケート結果と授業の感想

### (1) 事後アンケート結果

家族・家庭生活の授業を終えての事後アンケート調査を行い、「家族・家庭生活」についての分野、中でも性別役割分業意識や結婚観、家族観について、生徒の意識について調べてみた。

### ① 性別役割分業意識について

図2は、性別役割分業意識についての回答結果である。図2から、「反対」「どちらかという反対」という意見が多かった。理由としては、「女の人も仕事をしたい人もいる。決めつけるのは良くない。家族だったら皆で協力して家事、育児をしていくべきだと思う。共働きは大変だから。「男女とも仕事家事したい人もいる。能力をつぶしてしまうのは良くない。性によって差別的な意識があるのは良くないと思う。」などがあつた。一方「賛成」「どちらかという賛成」の意見では、「男女で得意なものの傾向が決まっているから。決まっていた方がお互いやりやすい。女性の方が家事や育児が得意だと思うから。自然だと思うから。向き不向きがある。自分は家事をしたいから。」というような意見があつた。

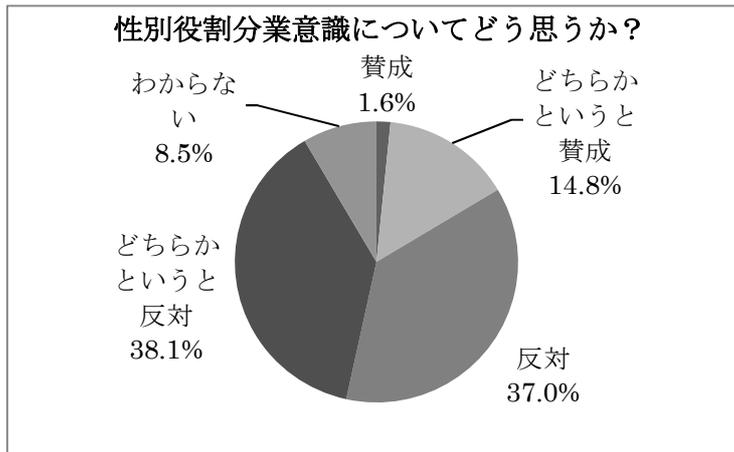


図2 事後アンケート結果1：性別役割分業意識 (N=189)<sup>4</sup>

### ① 将来結婚したいかどうか

図3は、「将来結婚したいと思うか」に関する事後アンケートの結果である。ほとんどの生徒が将来結婚をしたいと思っていることが分かる。「したい」と答えた生徒は、子どもが欲しい。好きな人と一緒に暮らしたい。新しい家族をつくりたい。孤独死はいやだ。一人はさみしい。などで孤独死の記事が印象に残ったという生徒もいた。一方「したくない」と答えた生徒は、「めんどくさそう。ややこしそう。お金を自分に使いたい。縛られたくない。」など、今の晩婚化の一因としてもあげられるものだった。

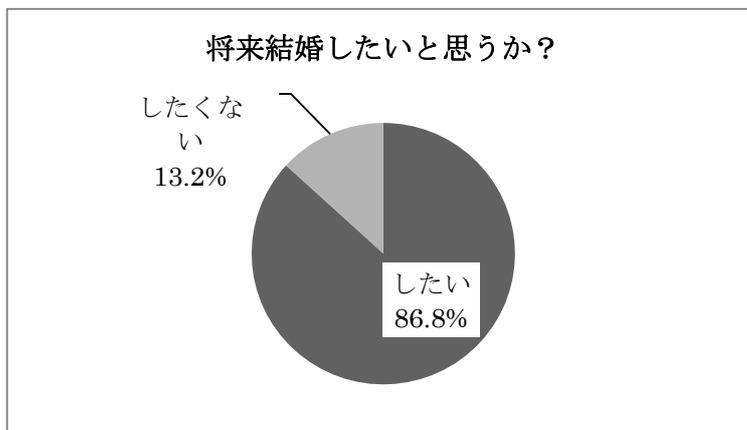


図3 事後アンケート結果2：将来結婚したいと思うか (N=182)

## ② 事実婚についてどう思うか

図4は「事実婚についてどう思うか」についての、事後アンケート結果である。「よい」と答えた生徒がやや多かった。「個人の自由。いろんな関係があって良いと思う。お互いがあることを了解しているのならよい。というような意見であった。「よくない」と答えた生徒は、「けじめがつかない。届けを出さないと不利な立場になったり、問題やトラブルが起こる。子どもが困る。結婚を軽く見てしまう。」などがあった。

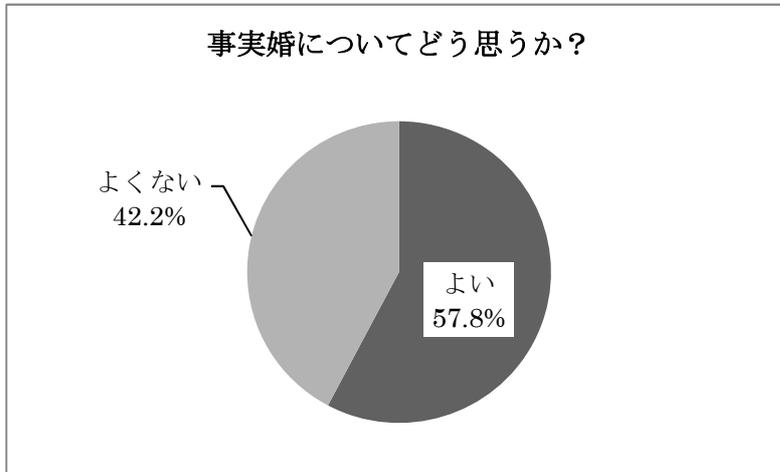


図4 事後アンケート結果3：事実婚についてどう思うか？ (N=187)

## ③ 夫婦別姓についてどう思うか

図5は、夫婦別姓についての事後アンケート結果である。「よくない」と答えた生徒がやや多かった。「よい」と答えた生徒は、「仕事上の理由で姓が変わると不便なことがでてしまうから。選択の幅を広げられるのはよい。人それぞれの考えがある。変えるのが面倒。」、「よくない」と答えた生徒は、夫婦の自覚や責任を持つためにも同じがよい。夫婦の証。子どもはどちらの姓にするのか困る。名字が違うと家族という感じがしない。」などがあった。

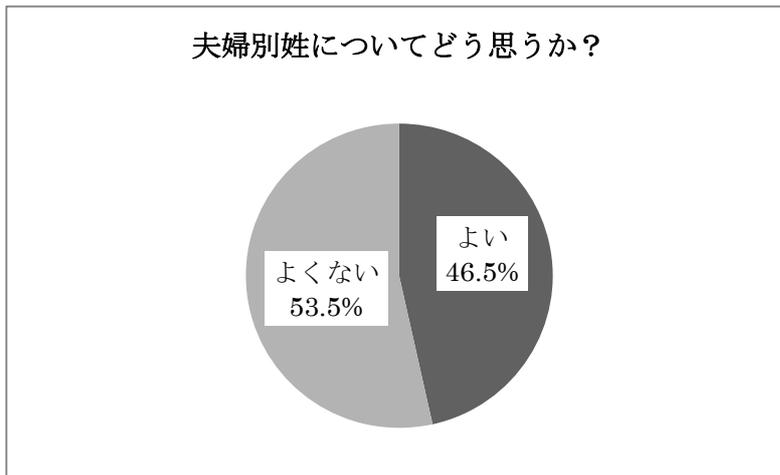


図5 事後アンケート結果4：夫婦別姓についてどう思うか？ (N=187)

## (2) 「世界の家族」に対する生徒の感想

この授業のなかで、とりわけ高校と大学の「共同研究」としての意味を持つ「世界の家族」の授業について、生徒の感想を示す。(資料1)

この「世界の家族」授業実践事例では、日本以外の家族を知ることにより、日本の家族への理解を深め、視野を広げることができた実感する生徒も多かった。

## 資料1 「世界の家族」の授業に対する生徒の感想

- ・日本を観点において家族のことを学んできたが、世界とそれを比較することによってたくさんの違いを知ることができた。観点を変えて考えを出してみるのはとても良い学習になると思った。
- ・日本と世界はこんなにも違うんだと衝撃を受けた。スウェーデンや他国は自由な面が多くてうらやましいと思った。
- ・日本という中だけでは、今の世界的な基準を知ることはできないから、たくさんの制度などを知ることができたのでとても良い授業だった。
- ・日本と比較しながら考えていくことで、世界とどこが違うのかが理解しやすかった。またそれによって日本の改善点も見つけることができ非常に意味のある授業だったと思う。
- ・それぞれ、自分たちの調べたい国について分かれて話し合っただけで考えることにより、様々な国についても学べ、互いの意見の違いも聞けるので理解しやすかった。
- ・世界の家族と比べて日本の家族は性別役割分業意識がまだ少し強いと思う。なのでもっと社会が男の人が育児をできるということを広めていくべきだと思う。

### (3) 「家族・家庭生活」分野の学習を終えての感想

「家族・家庭生活」分野の学習を終えた時点で、生徒が書いた感想の一部を資料2に示す。

## 資料2 「家族・家庭生活」分野の学習を終えての感想（生徒の意識の変化）

- ・あまり、自分の生き方について考えたことがなかったので生き方について考えるいい機会になった。これをきっかけに自分の人生をいいものにしたい。
- ・自分と家族について一生かかわっていくことだと思うのでこうして改めて授業で考えることができよかった。
- ・自分らしさの生き方を学んで、家族についても学び、自分に合っているパートナーを見つけて結婚したいと思いました。夫婦という存在に責任を持ってお互い協力し合う、そんな素敵な家庭をつくれれば幸せだと思います。
- ・自分の家族って一番近くにあるものだけど、当たり前すぎていつも考えることはほぼないから、身近にあるけど一番大切なものについて考えることができたと思います。  
自分の意志や家族って大切にしていけないといけないんだなと思いました。
- ・結婚して家庭をつくるなら、家事や育児を一生懸命一緒にやってくれる男性と結婚したいと心から思った。シングルマザーにとって苦しくない社会に日本がなると良いなと思った。
- ・今までの自分の意識が変わっていったような気がする。「自分らしさ」を出しながら「他人と協力」をするということが、どのようなことか考えてみたい。
- ・精神的、社会的に自立すること、またその間支え続ける家族のこと、今まで軽く考えていたけど、少し変わりました。家族がどれだけかけがえのないものなのかは、普段一緒にいるとあまり実感が湧きませんが今回の授業を通して少しでもその考えが変われたので、もっと身の回りのことを考えて生活していこうと思いました。
- ・今回の授業内容は、本当に自分の生き方や将来のことについて深くかんがえさせられた。これから先、自分が思っている方向とはちがう方になってしまうこともたくさんあると思うけど、授業で学んだ家族のあり方と、男女の権利の知識を生かしていきたいと思う。

今回の「家族・家庭生活」の分野における授業実践では、生徒に考えさせる、他の人の意見を聞くなどの活動に重点をおき、グループで話し合う時間を設けた。初めのアンケート調査で、「家族との関わり方」

「自分らしい生き方」について関心はあるものの、社会での出来事を自分と関連付けて考えられず、実際には今までに深く考えたことはなかったという生徒が多く、「家族・家庭生活」の授業の重要性について授業者自身が改めて感じる結果となった。さらに、グループで意見を出し合い、話し合ったりしてまとめ、発表するなどの体験的な学習活動を通して多角的な物の見方が得られ、自らの意識が変わり、広い視野で物事を考えられるようになった生徒も見受けられた。

## Ⅶ 考察とまとめ

生徒たちにとっては、「自分らしい生き方」について関心はあるものの、「家族・家庭の意義」や「家族・家庭と社会との関わり」については、問題意識こそあっても、自分の周りの小さな社会を見ているだけで、自身のことと関連付けて考えられず、最初は興味を示さない生徒も多かった。それは、生活をする基盤としての家族・家庭のあり方については、日常的に親や身近な大人たちからすでに示されており、あらためて学習する必要など感じなかったからであろう。

しかし、一方で、多くの生徒たちは「男は仕事、女は家庭」などの性別役割分業に縛られない「自分らしい」生き方を望んでいるという事実もある。生徒自身が現在や将来の生活を展望する中で、性別役割分業を肯定する生徒もいる現実と、単独世帯の増加など家族が機能しないという現実。ライフスタイルが様々な変化する中、家族・家庭のみならずそれを取り巻く家族以外の人々・機関あるいはそれを支える制度など、今こそ「家族・家庭」分野の学習に、重要な意義があると考え。今後は、「家族・家庭」分野の学習をいかに自分と関連づけて考えさせていけるかという点を課題としていきたい。

高等学校普通教科「家庭」では、家庭の機能は「家族員それぞれの協力により果たされることを理解させる」とあり、具体的な事例や演習を通して考えさせたり、話し合いや調査・研究を取り入れたりするなど、生徒が主体的に取り組む学習活動の工夫が求められている。家庭科の指導は、これまで、被服製作や調理実習などの個別技能の習得に重点が置かれる傾向が見られた。学習指導要領の指導計画の作成に当たっての配慮事項では、『家庭基礎』、『家庭総合』及び『生活技術』の各科目に配当する総授業時数のうち、原則として10分の5以上を実験・実習に配当すること。」と示されており、被服製作や調理実習以外の分野においても、実践的、体験的な学習活動を通して、教科の目標を実現することをねらいとしている。今後も、「家族・家庭生活」の分野の他、各分野の内容を関連付けて、生活を総合的にとらえる指導全般について、より実践的・体験的な学習活動を重視した題材を開発していきたい。

## Ⅷ おわりに

最後に授業の実践報告をふまえて、現代社会を生きる青年たちが学ぶ「家族・家庭生活」の授業を創るうえで、論点になると思われる点を記しておきたい。

第一に、今回、高大連携授業として大学で開講された単発の授業「世界との比較」を高等学校の授業に組みこむ取り組みに関してである。世界の家族との比較は、単元の冒頭に持ってくると「現実を相対化する」効果が大きいと、生徒の現実とうまく繋がらないと「世界にはそのような生き方、社会の仕組みがあるのか」で終わってしまい、「よそ事」で終わってしまうことが危惧される。「相対化」と「自分が生きることを考えること」の兼ね合いについて、さらに議論を深める必要がある。

第二に、「パートナー」という枠組みで人生を考える教材の扱いについてである。本授業実践の中に含まれる、流行歌の比較を通して「パートナー」間のパワーや役割について考える授業は、高校生の関心からして、大変有効であったと考えられる。しかし、その一方で「パートナー強調」によって少数派の生徒たち（同性愛、シングル志向など）が授業に入りにくい可能性も視野にいれる必要がある。パートナー関係を扱う時も、多様なライフスタイルの可能性という認識を基礎において授業を構成することが重要だと考える。

第三に、「家族・家庭」の機能とどう向き合うか、という問題である。「はじめに」で述べた、人間が

育ち生きていく条件の格差拡大と、家族の現代的変容をふまえれば、「子育て」や「情緒的機能」など、近代家族を前提とする機能を、家庭の中で果たすことができない人生は、もはや例外ではない。生活を支えるさまざまな機能を、家族外の人間関係、NPO や行政などの外部機関、社会政策など、家族・家庭の外部をも視野に入れた授業展開も、今後、さらに模索される必要がある。

愛知教育大学は附属高校と大学が同じキャンパスにある。本報告は共同研究の萌芽となる取り組みであったが、今後、「地の利」を生かして、さらに活発な共同研究がなされることを期待したい。

## 注

1. 本報告は、2～7を橋爪が、1および8を山根が書き、調整する過程を経て作成した。報告の中心となる授業は、橋爪が附属高等学校において実践したものである。なお、授業の最後に位置づけられている「世界の家族」は、愛知教育大学で2012年3月に行われた「高大連携スクール」で山根が行った授業内容が反映されており、その意味でも高等学校と大学の共同研究の第一歩となる取り組みと位置づけることができるだろう。
2. たとえば『家族社会学研究』Vol. 21 No. 1の特集「経済の階層化と近代家族の変容—子育ての二極化をめぐる」に詳しい。（日本家族社会学会編、2009）
3. 「男女共同参画社会に関する世論調査」は日本政府が継続的に行っている調査である。「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対して肯定する人の割合は、1979年調査から2009年調査まで一貫して減少してきたが、2012年調査で初めて前回調査より増加した（2009年調査 肯定41.3%、否定55.1%、2012年調査 肯定51.6%、否定45.1%）。なかでも20代は2009年調査で肯定30.7%、否定67.1%、2012年調査で肯定50.0%、否定46.7%と、肯定する人の割合の増加が大きい年齢層である。  
（内閣府ホームページ参照、<http://www8.cao.go.jp/survey/index.html>）
4. 無回答の票は除いた値である。図3～図5も同様である。

## 文献

- 子どもの貧困白書編集委員会編、2009『子どもの貧困白書』明石書店
- 日本家族社会学会編、2009『家族社会学研究』Vol. 21 No. 1（特集「経済の階層化と近代家族の変容—子育ての二極化をめぐる」）
- 本田由紀、2008『「家庭教育」の隘路—子育てに強迫される母親たち』勁草書房
- 船橋恵子・宮本みち子編著、2008『雇用流動化のなかの家族：企業社会・家族・生活保障システム』ミネルヴァ書房
- 文部科学省、2009『平成21年3月公示 高等学校学習指導要領』
- 山田昌弘、2005『迷走する家族—戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣